

文型論における O' と C' の扱いをめぐって

野村 忠央

欧米言語文化学会30周年記念出版
『多次元のトピカ』掲載論文抜刷
2021年12月31日発行

文型論における O' と C' の扱いをめぐって

野村 忠央

1. はじめに

以下の (1a, b) が共に S + V (+ M) の第 1 文型に、(2a, b) が共に S + V + O (+ M) の第 3 文型に分類されてしまうことの不備は伝統的な 5 文型理論の問題点としてしばしば指摘されてきたことである。すなわち、統語範疇は同じ前置詞句 (PP) であっても (1b) の *in Sapporo*, (2b) の *on the table* という前置詞句は (1b'), (2b') に示す通り省略不可能であり、*live*, *put* にとって義務的な (obligatory) 前置詞句であるのに対し、(1a) の *in Sapporo*, (2a) の *on Monday* という前置詞句は (1a'), (2a') に示す通り省略可能であり、*die*, *play* にとって随意的な (optional) 前置詞句である。

- (1) a. John died *in Sapporo*. a'. John died.
 b. John lives *in Sapporo*. b'. *John lives. (「住む」の意で)
- (2) a. Mary plays tennis *on Monday*. a'. Mary plays tennis.
 b. Mary put the book *on the table*. b'. *Mary put the book.

野村 (2019) でも記した通り、理論言語学では (1b) の *in Sapporo*, (2b) の *on the table* のような動詞にとって義務的な目的語、補語、副詞類 (obligatory adverbials) を総称して補部 (complement) と呼び、一方、(1a) の *in Sapporo*, (2a) の *on Monday* のような随意的な修飾語 (modifier) を付加部 (adjunct) と呼んで区別している。

以上の如き問題点を踏まえ、外池 (2014) では伝統的な 5 文型理論において使用される文の要素 (理論言語学的には文法機能 (grammatical function) と等価) S, V, O, C に前置詞句で表される要素を ' (ダッシュ) で示した DO' と C' を加え、(3a-h) の 8 文型説を提示した。¹ 従来の文型については説明を要しないため、増えた 3 つの文型 (3c, f, h) の例文、説明を (4-6) に示す。

- (3) a. S + V b. S + V + C c. S + V + C'
 d. S + V + O e. S + V + IO + DO f. S + V + DO + IO'

g. S + V + O + C h. S + V + O + C'

(4) S + V + C'

- a. I am *in my office* right now.
 b. 前置詞を含む補語をC'と表す。
 c. <C'= 場所>の場合の動詞→ be, come, go, arrive, depart, travel など
 d. <C'= 状態>の場合の動詞→ <S + V + C>の「状態」の場合と同じ動詞 (=状態→ be, remain, keep, stay など, 変化→ become, get, grow, turn など, 知覚→ look, appear, seem, feel, smell, sound, state など)

(5) S + V + DO + IO'

- a. John gave those books *to Mary*.
 b. Mike wrote a long letter *to Nancy*.
 c. Frank bought a lot of flowers *for Emily*.
 d. このように間接目的語が前置詞句の場合IO'と表す。
 e. この文型は前置詞句により2つに分類される (=to → show, send, offer, bring, pay, sell, send, teach, pass など, for → get, find, make, cook, fix, prepare, play, sing など)

(6) S + V + O + C'

- a. Jim put the book *on the shelf*. <The book was on the shelf.>
 b. Brenda kept the car *in good condition*. <The car was in good condition.>
 c. C'がOの場所・性質・状態を表している。
 d. <C'= 場所>の動詞→ place, hold, set, get, have など
 e. <C'= 状態>の動詞→ consider, find, prefer, want など

(以上, 外池(2014: 8, 10, 12)参照)

そして, 外池(2014)の改訂版外池(2017)及びその解説外池(2019)では(3a-h)の8文型に更に(7)のS + V + O'を加え, 9文型説を採用した。

(7) S + V + O'

- a. She is looking *for a job*. b. You must concentrate *on the job*.
 c. I will talk *to him* later. d. 前置詞を含む目的語をO'と表す。
 e. 目的語(O/O')は主語の作用の影響が及ぶ対象を表すことが多い。

(外池(2017: 8)参照)

本稿執筆のきっかけは授業中, 学生から以下の(9)の質問が複数, 出たことである。

- (8) a. I live in Tokyo.
 b. We all went to the graduation party. (外池編 1995: 9)
 c. He arrived at the airport. (外池 2019: 68)
 (9) 教科書に基づくと(8a-c)はC'となるが, O'ではないのか?

筆者も実のところ, 同様の所感を持っていた。本稿ではこの問いを糸口に「目的語とは何か」という問題を考えてみたい。本書は英語学者のみならず, 英米文学研究者, 英語教育学者も広く手にすると思われる。本稿の目的は「目的語とは何か」という, 一見明白そうな, しかし, 実は難問の問題について, 英語に携わる全ての方と共に考えてみたいということである。

2. 目的語性診断テスト

まず本節では, 筆者が年来より考えていた目的語性(objecthood)を診断するためのテストを提案する。その際, 議論のために以下の英文を中心に考察を進める。

- (10) a. John broke the window. b. I see the moon.
 c. He weighs 200 pounds. d. Mary resembles her father.
 (11) a. She walks in the morning. b. I live in Tokyo.
 c. We went to school. d. He arrived at the airport.
 e. John relied on the doctor.
 (12) a. He gave me a book. b. I bought her flowers.
 c. He gave a book to me. d. I bought flowers for her.
 (13) a. She made me happy. b. She put the book on the shelf.
 (14) a. He looks happy. b. He became a doctor. c. He is in the garden.

2.1. ①補部テスト

まず, 大前提として動詞に後続する要素が補部でなければ目的語とは言えない。すなわち, 動詞に後続するXP(何らかの統語範疇=品詞の最大投射)²が

動詞の選択する必須要素であれば補部、そうでなければ付加部であり、それは動詞にとっての随意的要素あるいは修飾語句となる。³そして、補部か付加部かを判断する最も基本的なテストは「省略可能性 (Deletability) テスト」である。(10-14)の下線部、波線部に省略可能性テストを掛けると、(11a)の *She walks.* と (12d)の *I bought flowers.* が文法的になるので、その下線部は付加部であるが、それ以外の下線部は基本的に全て補部だということになる。⁴

注意すべき点を記すと、外池 (2019) でも記されていることだが、*arrive* など、動詞に後続する要素が前置詞句の補部である場合、これらの文が発せられる前の文脈で到着点が記されている場合 (例えば、*at the station*) や、あるいは到着点が話し手と聞き手がいる *here* である場合には *He arrived.* などの文が可能である。それに対し、同義の *He reached the station.* は到着点が空港であることがわかっているが、**He reached.* は言えず、統語的に *He reached it.* と目的語を明示しなければならない。

また、(12a)下線部の *give* 型動詞の間接目的語は省略できないので補部であるが、(12b)下線部の *buy* 型動詞の間接目的語は省略できるので付加部だということになる。また、(13b)の *put* 型動詞は学校文法では第3文型 (S + V + O (+ M)) とされるが、下線部 *the book* も波線部 *on the shelf* も省略できないので、実際にはどちらも補部だということになる

次に、補部テストのより厳しいものとして「do so テスト」(*do so test*) が挙げられる。概略、do so テストの外に出られれば付加部、出られなければ補部である。⁵ 例えば、(12a, b) は外池 (2014, 2017, 2019) の分類ではどちらも S + V + DO + IO' の文型とされる。しかし、下記 (15a, b) の do so テストの結果からすると、*give* 型動詞の *to* 句は補部だが、*buy* 型動詞の *for* 句は実は付加部だということを示している。

- (15) a. **John gave chocolate to Mary, and Bill did so to Nancy.*
 b. *John bought flowers for Mary, and Bill did so for Nancy.*

以上の点からも do so テストは有用なテストであるが、但し、意図性がある動詞にしか do so テストは適用できないという弱点がある。

以上の議論を踏まえ、補部は +1 点、付加部は決定的に目的語ではないことを意味するので -1 点を付与することにする。

2.2. ②後続要素 NP テスト

次に目的語の統語範疇 (品詞) についてのテストであるが、意味論的に「目的語 (O/O') は主語の作用の影響が及ぶ対象」((7) 参照) ということから、それに相当する統語範疇のプロトタイプ (典型例) は NP (名詞句) となる。一方、「主語の状態、性質を表す補完部を必要とし、これを補語 (C) と呼ぶ」ということから、それに相当する統語範疇のプロトタイプは AP (形容詞句) となる。

それを踏まえ、(10-14) に動詞に後続する範疇を列挙したが、以下、目的語のプロトタイプである NP は +1 点 (= (10a-d), (12a-d) の下線部, (13a, b) の下線部), 目的語には決してなれない AP (言い換えると補語のプロトタイプである) は -2 点 (= (13a) の波線部, (14a) の下線部), それ以外の品詞, すなわち PP (前置詞句) (= (11a-e) の下線部, (12c, d) の波線部, (13b), (14c) の下線部) や CP (節) ((例) *I believe [CP that the universe is expanding].*) は中間的要素として -1 点と考える。

なお、当然ながら、この統語範疇の目的語性は主語性の場合も同様である。次例 (16a-d) を参照のこと。

- (16) a. [_{NP} Tony] built a boat by himself.
 b. [_{PP} Under the table] is a nice place for the cat to sleep.
 c. [_{CP} That the patient recovered] surprised the doctor.
 d. **[_{AP} Sincere] frightened the boy.* cf. *Sincerity frightened the boy.*

これら主語、目的語として可能な統語範疇かを判断する統語テストとしては「分裂文 (= 学校文法の強調構文) の焦点位置に生起可能か」が挙げられる。すなわち、主要範疇のうち、生起可能な (17a) の DP (= NP),⁶ (17b) の PP, (18) の CP は主語、目的語位置に現れうるが、生起不可能な (17c) の VP, (17d) の AP は主語、目的語位置に現れ得ないということである。

- (17) a. *It was John that hit Mary.* (DP)
 b. *It was in July that John met Mary.* (PP)
 c. **It was hit Mary that John.* (VP)⁷
 d. **It was happy that John was at that time.* (AP) (Nomura 2006: 77)
 (18) *It was [CP that he would say such a thing] that surprised me.*⁸

2.3. ③被動者テスト

次に、外池 (2017: 8) の (7e) の定義「目的語 (O/O') は主語の作用の影響が及ぶ対象を表すことが多い」を主題役割 (thematic role) の観点から定式化すると「動詞に後続する要素が「被動者」(patient) かどうか」と言い換えられる。被動者とは概略、「ある行為の影響を受ける (affected) もの」ということであるが、それは以下のような統語テストで確かめることができる。つまり、(19a), (20a) のテストを満たしている the window は被動者だが、(19b), (20b) のテストを満たさない her father は被動者ではないということになる。

- (19) a. *What happened to the window was John broke it.* (←(10a))
 b. **What happened to her father was Mary resembles him.* (←(10d))
- (20) a. *What John broke was the window.* (←(10a))
 b. **What Mary resembles was her father.* (←(10d))

この被動者テストは意味論的にも重要である。すなわち、(10a, b), (12a-d), (13a, b) の下線部は被動者であるが、それ以外の下線部、波線部は全て被動者ではない。我々は様々な目的語がある中で (10a, b), (12a-d), (13a, b) の下線部のような目的語が目的語性が高いという直観があるが、それは「被動者テスト」によって確かめることができるということである。

以上の議論を踏まえ、被動者には +1 点、被動者ではないものには -1 点を付与することにする。

2.4. ④受動化 (Passivizability) テスト

これも前節と並んで重要な統語テストで、受身が可能であれば間違いなく目的語であると言える。⁹ すなわち、下記例文の下線部は受動文主語であるが、能動文でそれに対応するものが目的語だと断定できるということである。

- (21) a. *The window was broken by Tom.* (←(10a))
 b. *Mt. Fuji can be seen from here on fine days.* (←(10b))
 c. **Two hundred pounds are weighed by him.* (←(10c))
 d. **Her father is resembled by Mary.* (←(10d))

ここで重要なことは、前節の「被動者テスト」と本節の「受動化テスト」が完

全にリンクしていれば、break や hit のような動詞のみが受動化が可能で、それ以外の動詞は受動化が不可能ということになるはずである。しかし実際には、確かに resemble や weigh は受動化が不可能であるが、like や see は受動化が可能なのであり、両者は独立のテストとして必要である。¹⁰

また、このテストはその他、様々な点で示唆的で、例えば、(12b) 下線部の間接目的語 her は 2.1 節の省略可能性テストからは目的語性が低いと判断されたが、受動化テストが通る点では目的語だと主張可能である ((22) 参照)。しかし、話者によっては容認性が低く ((23b) 参照)、やはり give 型の間接受動文が全く問題ないことと比べると ((23a) 参照)、(12b) 下線の buy 型の間接目的語は相対的に目的語性が低いと考えるべきだと結論できる。

- (22) *Mary was bought a new dress by John.* (安藤 2005: 356)
 (23) a. *Mary was given a book by John.*
 b. ?**Mary was bought a ring by John.* (高見 2003: 63)

ここで、本題の外池 (2014, 2017, 2019) で C' とされる例を考えてみよう。確かに、以下に示すように外池が C あるいは C' とするものは全て受動化が不可能である。筆者はこの「受動化テスト」が外池が O' ではなく C' と考える根拠ではないかと想像する。¹¹ 次例 (24-26) 参照。

- (24) a. **Tokyo is lived in by me.* (←(11b))
 b. **School was gone to by us.* (←(11c))
 c. **The airport was arrived at by him.* (←(11d))
- (25) a. **Happy was made me by her.* (←(13a))
 b. **The shelf was put the book on by her.* (←(13b))
- (26) a. **Happy is looked by him.* (←(14a))
 b. **A doctor was become by him.* (←(14b))
 c. **The garden is been by him.* (←(14c))

しかし、ここで重要な点は (25a, b), (26a-c) はどんなことをしても受動化できないが、(24a-c) は語句を変えれば受動化が可能であるという点である。

- (27) a. *This room must be gone into only by the staff.*

- b. The U. S. has been lived in by generations of immigrants. (高見 2011: 119)
- c. The conclusion was arrived at by five o'clock. (Bolinger 1975: 68)

筆者は(27a-c)の「受動化テスト」の結果からすると、go (in)to, live in, arrive atもO'と考えるべきだと結論する。なお、外池がO'と分類しているlook for, count on, talk to, set to, depend on, rely on, look up toは「前置詞句動詞」, 「句前置詞句動詞」と呼ばれるもので複合動詞, イディオムとしての分析も可能であるが、go (in)to, live in, arrive atは文字通りの意味であり、複合動詞ではないことに注意すべきである。¹²

2.5. ⑤ Be 動詞テスト

この「be 動詞テスト」は「目的語は主語の対象である」, 「補語は主語の性質, 状態を表す」ことを定式化したものである。つまり, 「補語が主語の性質, 状態を表す」ということは「主語が補語とイコールである」ということであり, 「目的語が主語の対象である」ということは「主語と目的語はイコールではない」ということを, それぞれbe 動詞を用いて言語的に定式化するテストである。概略, 「be 動詞を挟んで文意が成立すれば補語, そうでなければ目的語」ということであるが, 学校文法で暗黙裡に一番用いられてきたテストだと考えられる。以下の例を見てみよう。

- (28) a. *John was the window. (←(10a)) b. *I was the moon. (←(10b))
c. He is 200 pounds. (←(10c)) d. (*Mary is her father. (←(10d))
- (29) a. I am in Tokyo. (←(11b)) b. *We were to school. (←(11c))
c. He was at the airport. (←(11d)) d. John was on the doctor. (←(11e))
- (30) a. He is happy. (←(14a)) b. He was a doctor. (←(14b))
c. He is in the garden. (=14c)

典型的な目的語である(28a, b)は非文, 典型的な補語である(30a, b)及び前置詞補語である(30c)は文法的であり, 予想通りの結果である。興味深いのは(28c, d)でこれらの文の文意が成り立つことから,¹³ 目的語性よりは補語性が高いという結果となる。つまり, 受動化テストと同様の結果を予測する。そして, 本稿の主題の(29a-d)については文意が成り立ち, 外池の主張する補語性が高

いという結果になる。

なお, 言うまでもなく, 間接目的語と直接目的語の関係, 目的語と目的格補語の関係においてもbe 動詞テストは有用である。次の例を見てみよう。

- (31) a. *I was a book. (←(12a)) *b. She was flowers. (←(12b))
c. *A book was to me. (←(12c)) d. Flowers were for her. (←(12d))
- (32) a. I was happy. (←(13a)) b. The book was on the shelf. (←(13b))

すなわち, (31-32)の結果から, (13a, b)波線部は補語であり, (12a, b)の波線部は(直接)目的語であることを意味している。¹⁴ 興味深いのは, (12d)の波線部は外池(2014, 2017, 2019)では前置詞間接目的語(IO')とされるが, be 動詞テストの(31d)の結果からは前置詞補語(C')だと言えるということである。¹⁵ 実際, O', IO'という記号を用いないQuirk *et al.* (1985)や安藤(2005, 2008)は(11b-e)下線部, (12c, d)波線部, (13a, b)波線部, (14c)下線部のような義務的な前置詞句を全てA(副詞類)として処理している。¹⁶

以上の結果から, be 動詞テストを満たすものは補語的であるので-1点, 満たさないものの逆に目的語的であるので+1点を付与することにする。

3. 各例文の目的語性診断テストの結果及び提案

さて, 前節の目的語性診断テストの議論を踏まえ, 本節では各例文の診断テスト結果を表1に示し, その後, 目的語性についての筆者の提案を述べる。なお, 表中の①~⑤はそれぞれ前節に示した①補部テスト, ②は後続要素NPテスト, ③被動者テスト, ④受動化テスト, ⑤be 動詞テストを, また, ±の数字はテスト結果による数値を示している。

表1	①	②	③	④	⑤	合計	例文
(10a)	+1	+1	+1	+1	+1	+5点	John broke <u>the window</u> .
(10b)	+1	+1	-1	+1	+1	+3点	I see <u>the moon</u> .
(10c)	+1	+1	-1	-1	-1	-1点	He weighs <u>200 pounds</u> .
(10d)	+1	+1	-1	-1	-1	-1点	Mary resembles <u>her father</u> .
(11a)	-1	-1	-1	-1	-1	-5点	She walks <u>in the morning</u> .
(11b)	+1	-1	-1	+1	-1	-1点	I live <u>in Tokyo</u> .

(11c)	+1	-1	-1	+1	+1 ¹⁷	+1 点	We went <u>to school</u> .
(11d)	+1	-1	-1	+1	-1	-1 点	He arrived <u>at the airport</u> .
(11e)	+1	-1	+1	+1	+1	+3 点	John relied <u>on the doctor</u> .
(12a)	+1	+1	-1	+1	+1	+3 点	He gave <u>me</u> a book.
(12a)	+1	+1	+1 ¹⁸	-1 ¹⁹	+1	+3 点	He gave <u>me a book</u> .
(12b)	-1	+1	-1	+1	+1	+1 点	I bought <u>her</u> flowers.
(12b)	+1	+1	+1	-1	+1	+3 点	I bought <u>her flowers</u> .
(12c)	+1	+1	+1	+1	+1	+5 点	He gave <u>a book</u> to me.
(12c)	+1	-1	-1	-1 ²⁰	+1	-1 点	He gave <u>a book to me</u> .
(12d)	+1	+1	+1	+1	-1	+3 点	I bought <u>flowers</u> for her.
(12d)	-1	-1	-1	-1	-1	-5 点 ²¹	I bought <u>flowers for her</u> .
(13a)	+1	+1	+1	+1	+1	+5 点	She made <u>me</u> happy.
(13a)	+1	-1	-1	-1	-1	-3 点	She made <u>me happy</u> .
(13b)	+1	+1	+1	+1	+1	+5 点	She put <u>the book</u> on the shelf.
(13b)	+1	-1	-1	-1	-1	-3 点	She put <u>the book on the shelf</u> .
(14a)	+1	-2	-1 ²²	-1	-1	-4 点	He looks <u>happy</u> .
(14b)	+1	-1	-1	-1	-1	-3 点	He became <u>a doctor</u> . ²³
(14c)	+1	-1	-1	-1	-1	-3 点	He is <u>in the garden</u> .

以上の数値化された点数を勘案し、筆者は以下を提案したい。²⁴

- (33) a. +1 点以上のものは目的語である。
 b. -1 点は周辺の目的語である。
 c. -2 点以下のものは目的語ではない (= 補語あるいは付加部である)

つまり、(9) の疑問を持った学生や筆者は (33b) の立場を採っていることになるということである。それに対し、外池 (2014, 2017, 2019) は以下の (34) の立場を採っていると考えれば整合的である。

- (34) a. +1 点以上の補部は目的語である。
 b. -1 点以下の補部は補語である。

その場合、(10c) weigh, (11d) の resemble, 与格構文 (12c) の to 句, (12d) の for 句なども補語 (C) あるいは前置詞補語 (C') とすることになるが、外池の主

張の通り、live, go, arrive などに続く前置詞句が C' であるなら、全く一貫しているとは筆者には感じられる。

4. S + V + DO + IO' 文型との整合性

最後に、筆者や学生が (9) の疑問を感じた理由を考えてみたい。それは、(12c, d) のいわゆる与格構文に対して、外池 (2014, 2017, 2019) は S + V + DO + IO' 文型を設定していることに由来すると考える。その理由として、仮に (12c, d) も (13b) 同様、S + V + O + C' だという説明がなされていれば、前置詞句の補部は一貫して C' となるので、(9) の疑問は起きなかったと思われるからである。ちなみに、Quirk *et al.* (1985) や安藤 (2005, 2008) の分類では (12c, d) も (13b) もどちらも S + V + O + A 文型となることに留意されたい。

しかし、筆者は与格構文を S + V + O + C' 文型とはせず、外池の主張する S + V + DO + IO' 文型と考える方が良いと考える。その理由は、前節で示した be 動詞テストとも関連するが、補語 (C あるいは C') は S あるいは O との間に関係があるとするのが伝統的であるからである。例えば、(13a, b) の基底構造あるいは意味構造は概略、以下だと考えられる。

- (35) a. She CAUSED me to BE happy. (←(13a))
 b. She CAUSED the book to BE on the shelf. (←(13b))

よって、(13a, b) の波線部は C あるいは C' ということになる。それに対し、(12a-d) の二重目的語構文及び与格構文の基底構造あるいは意味構造は概略、以下の (36a, b) だと考えられる。また、外池 (2019) でも (36a, b) とほぼ同様の (37a, b) のパラフレイズが記されている。

- (36) a. He CAUSED me to HAVE a book. (←(12a))
 b. He CAUSED a book to MOVE to me. (←(12a))
 (37) a. John gave Mary those books. → Mary got those books.
 b. John wrote Cathy a long letter. → Cathy got a long letter.
 c. John gave those books to Mary. → Those books belonged to Mary.
 d. John wrote a long letter to Cathy. → A long letter went to Cathy.

(外池 2019: 70, イタリアック筆者)

そうすると、IO と DO の関係は「所有」、DO と IO' の関係は「移動」ということになり、「繫辞」関係ではないので C あるいは C' は適切ではないという帰結になる。

そしてまた、(37c, d) の矢印の左側が S + V + [DO + IO'] 文型であるとするなら、矢印の右側の基底に隠れている belong to, go to 及び筆者の示した (36b) の move to など S + V + O' とした方が整合的だという結論になる。

5. おわりに

本稿では (9) の疑問を出発点として、目的語性診断テストを提案し、併せて、「+1 点以上の補部は目的語、-1 点の補部は周辺的な目的語である」と提案した。それに基づくと、(8a-c) は O' とした方が良いという帰結となる。同時に、「-1 点以下の補部は補語である」とすれば (8a-c) を C' と考える外池 (2014, 2017, 2019) とも整合的であり矛盾はないことも述べた。つまり、何を目的語、補語と捉えるかは段階性があるということである。²⁵

次に、外池が設定する S + V + DO + IO' 文型は S + V + O + C' 文型とする考えよりも妥当性があると主張した。(両者の文型の英文が同じ S + V + O + A 文型となってしまう、区別できないという点でも Quirk *et al.* (1985) や安藤 (2005, 2008) より優れていると考えられる。)

そして、S + V + DO + IO' 文型の基底構造、意味構造から考えると、(4c) の「〈C' = 場所〉の場合の動詞 → be, come, go, arrive, depart, travel など」の記述のうち、be に続く場合は C' として残し、それ以外の動詞は O' とした方が整合的で、学生にもわかりやすいというのが筆者の最終的な結論である。

* 本稿の内容に関し、有益なコメントをいただいた本学会の査読委員に記して感謝申し上げます。

また、筆者は本文で言及されている外池滋生先生（慶應義塾大学言語文化研究所兼任所員、元青山学院大学教授）とは 30 年近く前から文型論について何度となく大議論を重ねてきた。先生は実は 5 文型理論は不要で、個々の動詞の用法を一つずつ覚えることこそが重要だとのことである。本稿が先生との有益な議論のささやかな成果となっていることを願うものである。

注

1. その他、Quirk *et al.* (1985) の 7 文型説 (5 文型 + 「S + V + A 文型」 + 「S + V + O + A 文型」)、安藤 (2005, 2008) の 8 文型説 (Quirk *et al.* の 7 文型 + 「S + V + C + A 文型」) などがある。(なお、安藤 (2005) が提案する「S + V + C + A 文型」((例) I am fond of cats.) に対する批判としては八木 (2007) を参照のこと。)
文型論は枚挙に暇がないが、理論的、英語教育的立場から述べたものとして上記の他、例えば、勝見 (2001)、山岡 (2014)、中村 (2018a, b)、伊東 (2019) などが挙げられる。
また、文型論の起源についての研究として伊藤 (1993, 1996)、宮脇 (2012)、川嶋 (2015) がどれも労作として挙げられる。例えば、伝統的に 5 文型理論は細江 (1917) を通して、Onions (1904) に遡ると紹介されてきたが、宮脇、川嶋によれば、より正確には Copper and Sonnenschein (1889) に遡るということであった。学説史上、重要な指摘である。
2. 伝統文法的な線形順序ではなく統語論的、構造的用語を用いれば、「VP に支配される XP」と言い換えられる。
3. 「動詞に先行する XP」とすれば主語の定義となる。また、注 2 に準拠すると、「S (= IP) に直接支配される XP」となる。この XP を NP と断言できれば話はすっきりするが、節 (CP) や前置詞句 (PP) も主語になり得るので話は簡単ではない。
(i) a. [_{CP} That he is still alive] is certain.
b. [_{PP} Under the table] is a comfortable place.
4. (10b) の下線部を削除した *I see. はその文意と熟語の I see. (わかりました) との意味は異なるので、非文と考えるべきである。
5. 従来、「do so テスト」は VP (動詞句) の代用形だとされてきたが、近年の生成文法理論では動作性 (agency) のある他動詞句は v*P だとされる。
(i) [_{v*P} John v* [_{VP} hit Mary]]
これを踏まえると、do so は v*P の代用形とするのがより適切であると思われる。
6. Nomura (2006) では DP (決定詞句) が使用されているが本稿の議論では NP (名詞句) と全く同様に考えて差し支えない。
7. 当然、VP (動詞句) も目的語にも主語にもならない。そうするためには、VP を動名詞や不定詞にせねばならない。
8. 実は、目的語の CP は分裂文の焦点にはならないのだが、このことは稿を改めるべき問題である。
(i) *It is [_{CP} that the world is round] that I believe. (Nomura 2006: 92, fn. 18)
9. 「逆は必ずしも真ならず」で「受身にならなければ目的語ではない」とは断言できないことが難しい点であり、それが本稿の目的でもある。
10. 「動作主」(agent)、「被動者」などの概念を主題役割 (thematic role) と呼ぶが、主題役割と受動可能性を関連付けようという試みは当然、存在する。例えば、Jackendoff (1972) は (i) のような主題階層という概念を提案し、受動文には (ii) の適格性条件が課せられるとしている。
(i) 1. 動作主 (agent)
2. 場所 (location), 起点 (source), 着点 (goal)
3. 主題 (theme)

(ii) 受動文の by 句の NP は主題階層において派生主語より高い位置になければならない。

(iii) *Ten thousand dollars were cost by the car.

例えば, (ii) に基づくと, (iii) において by に後続する the car は「主題」であり, 派生主語 (= 受動文の主語) の Ten thousand dollars は「場所」であるが, 「主題」は「場所」より主題階層が高くないので非文ということになる。しかし, この主題階層による説明には反例が少なからず存在することも知られており, 必要十分な適格性条件とは言えない。

また, 以下の下線部は全く「被動者」ではないにもかかわらず, 受動文として何も問題のない英文である。つまり, 「被動者」が主語になった受身文は典型的な受身ではあるが, 目的語が「被動者」であることが受動化が可能であることの必要十分条件だとは言えないということである。

(iv) a. There is believed to be a monster in Loch Ness. (虚辞)

b. Unfair advantage was taken of Mary. (イディオム切片)

以上を踏まえた上で, 長谷川 (2003) の「受動形になりうる動詞に対する意味的制約」を見てみよう。

(v) ± motion / change 運動変化 (心理的变化を含む) と ± controllable / volitional 動作が制御可能か否か (意図が存在しうるか否か)

(vi) a. [+m, +c]: kick, kiss, eat, sing, open, hit, tough, move, read, ...

b. [+m, -c]: die, move, open, hit, touch, fall, precede, follow, ...

c. [-m, +c]: love, hate, like, believe, ...

d. [-m, -c]: resemble, weigh, cost, hold(= accommodate), fit, ...

(長谷川 2003: 98)

長谷川の主張する, (via-c) は受身が可能だが, 両方の素性がマイナスの (vid) は受身が不可能だという一般化は上記 (ii) より包括的な記述だと考えられる。

11. 外池 (2019) の以下の記述も参照。

(i) この文型 [= S + V + O の文型] については特に注意する点はありませんが, ただ次のような例は普通 S + V + O の文型の例とされるので注意が必要です。

(8) a. He weighs two hundred pounds. 「彼は体重が 200 ポンドである」

b. The car cost ten thousand dollars. 「その車は 1 万ドルした」

c. Mary resembles her father. 「メアリーは父親に似ている」

d. I have no time. 「私は時間がない」

これらの例では目的語とされる下線部を主語にした受動文ができません。学生に対する説明としては, これらは受動文をつくれぬ特殊な他動詞を含んでいるということでしょうが, 少なくとも最初の 3 つは S = O の関係があり, その意味からも S + V + C の文型であるとすら考えられます。(外池 2019: 69)

12. なお, 以下の go into の受身文は「～を論ずる」の意である (cf. (27a))。

(i) This problem will be gone into later.

(長谷川 2003: 82)

筆者は本文中で「go (in)to, live in, arrive at は文字通りの意味であり, 複合動詞ではない」と記したが, 長谷川 (2003) は [V P NP] の多くは生産的に, ①文字通りの [V + PP] の構造と②[V (= V + P からなる複合動詞) + NP] の構造の両方を持ち得るとしている。一般的には, 熟語的な意味を持つものを②の複合動詞と考え, 受動化が可能だと考えると, 思われるが, 長谷川は文字通りの意味でも潜在的には受動化が可能で, その場合 (下記

(iib) 参照) は②の複合動詞の構造をしていると考えている。

(ii) a. [^]The windows are looked into by John. ([^]は意味的逸脱を表す)

b. The window has been fiercely looked into by so many burglars that it finally cracked. (ibid.: 83)

これは傾聴すべき考えであると思うが, もしそうだとすれば, 「前置詞句動詞」の look for, count on, talk to, set to, depend on, rely on や「句前置詞句動詞」の look up to, catch up with, keep up within のみならず, 本稿で問題としている go (in)to, live in, arrive at など (受動化が可能の場合は) 全て複合動詞ということになり, それはすなわち後続する要素が全て目的語だということを意味することになる。

13. (28d) Mary is her father. に付されている (*) の意味は論理的にはメアリーが父と同じ人であるはずはないが, 「A と B が似ている」ということは意味論的に A と B が同じである (相似している) ことを意味する点で文法的と考えると良いということである。

14. もちろん「be 動詞テスト」もある種の指標であって完璧な診断テストではない。例えば, すぐに思い付く問題点として, 第 1 に, このテストは前置詞の影響を受けると思われる。つまり, be 動詞はその語彙的特徴として場所を表す前置詞 in や at とは親和性が高いが, 方向を表す前置詞 to とは結び付きが良くないと言える。

第 2 に, このテストでは I live in Tokyo. と I am in Tokyo. 及び He arrived at the airport. と He was at the airport. はどちらも文意が成り立つが, しかし, be 動詞の文は主語の状態を表しているのに対し, I live in Tokyo. と He arrived at the airport. は弱いながらも主語の作用の何らかの影響が及んでいる対象だと考えられる。その点ではやはり目的語性があるとすべきであろう。

15. なお, (ia) の下線のような第 5 文型の知覚動詞, 使役動詞の補部に現れる原形不定詞は学校文法では補語とされる。しかし, 本文の be 動詞テストを用いると (ib) に示すように非文となる。本稿で詳述する余裕はないが, (ia) の play tennis は (他の根拠も含め) 補語性はかなり低いと考えられる。(後述注 23 で言及する山岡 (2010: 82) の議論も参照のこと。)

(i) a. I saw her play tennis. b. *She was play tennis.

16. 但し, 安藤 (2008) は以下の (ia, b) のような, 形容詞的に働く前置詞句を補語と捉えていることも重要である。

(i) a. She's in good health. (=well)

b. Your memory is at fault. (=faulty)

(安藤 2008: 31)

これに対し, (14c) He is in the garden. は安藤は S + V + A 型と捉える。その根拠は (14c) は (iia) のように尋ねられること, また, (iib) のような擬似分裂文に書き換えられることを挙げている。

(ii) a. Where is he? b. Where he is is in the garden.

外池の場合, (14c) も (ia, b) も全て C' となることに注意されたい。

17. (11c) に⑤ be 動詞テストを掛けると *We were to school. となることから +1 点としているが, これは注 14 に記した要因による。意味構造的には be 動詞ではなく, We WENT to school. の関係が成り立つ。

18. (12a) He gave me a book. の me の意味役割は「着点」(goal) であり「被動者」ではない。それに対し, a book は一般的に「主題」(theme) と呼ばれるが, 本稿では安藤 (2005) や Radford (2016²) などに従い, 「主題」も「被動者」の一種であると考え。意

味役割の正確な種類とその定式化は実は容易ではない難題である。

19. (12a)の直接目的語に④受動化テストを掛けると、*A book was given me. と非文になるので-1点としているが、これはV [IO DO]の構造があった時、Vの方に近い(正確には高い)目的語が受動化されるという統語的制約に起因すると考えるべきである(Chomsky (1995)の最短連結条件(Minimal Link Condition), Radford (2016²)の直近誘引原理(Attract Closest Principle)など参照)。このようなDOを主語とする直接受動文は古い時代の英語では可能であった。また、wh疑問文では逆の文法性が生じ、DOのwh化が可能で((ia)参照)、IOのwh化が不可能になる((ib)参照)。これらの点から見た場合は、直接目的語の方が間接目的語より目的語性が高いという(ある種、直観に合う)結論が導かれる。

(i) a. What_i did you give him t_i? b. *Who_i did you give t_i a book?

20. (12c)波線部を受動化した*I was given a book to. は非文であるので-1点である。
21. (12d)波線部の-5点の結果が意味することは、(12d) I bought flowers for her. の波線部は学校文法で言うところの修飾語(M)そのものに相当するということの意味する。
22. 本稿では(14a-c)の補語は安藤(2005)に従い項(argument)ではないと考え、意味役割も持たないと考えておく。いずれにせよ、被動作主ではないので-1点を付すということである。
23. 匿名の査読委員より、望蜀かもしれないがウナギ文(日本語の「ほくはウナギだ」に代表される構文)はどうしたら良いであろうかというコメントが寄せられた。査読委員によると、米国の田舎のレストランで手書きだがAll order is self-service. という英文を見たことがあるということであった。確かに英語でも(レストランの注文などの際に)I am (the) coffee. というウナギ文が可能であることはしばしば指摘されることである。
筆者の目的語性テストでは⑤be動詞テストが議論であろうがAll order ≠ self-service. I ≠ (the) coffeeということからするとこのテストは+1点にならないといけなはずであるが、実際にはこの文が言えることがパラドックスであり、そして、そのことこそがこの構文が議論の俎上に挙がっている所以である。筆者としてはこれらの英文が英語として実際に存在していることからbe動詞テストは-1点(①~⑤の合計-2点)と考え、英語のウナギ文も補語だと考えるが、今後の課題としたい。

なお、査読委員から英語のウナギ文は破格構文であり通常の文法理論で派生され得ないことについても言及があった。そして、関連して査読委員から、本稿は言語事実に即した記述であり、筆者の意も良く分かったとの総評の上で、蛇足かもしれないがという以下のコメント(要旨)を頂戴した。

- (i) 評者も文型論が難しいのはよく承知しているつもりだが、もし文型論を実証的・理論的研究として書くとなると反証可能性(falsifiability)がなくてはならない。しかし、私見では、従来の文型論には反証可能性はないように見受けられる(元々、そのような要請がないものとして書いているので当然と言えば当然のことである)。ここで反証可能性というのは、「生徒の質問に過不足なく答えられる」と言い換えてもよいと思われるが、そのような文型論の議論やウナギ文の派生の「説明」を可能にする理論としてKajita (1977)等の動的文法理論(Dynamic Theory)を採用するのが良いと思われる。(下線査読委員)

筆者はこのコメントに対する見解があるのだが、今回は紙幅が許さないので、査読委員の貴重なコメントとして承り、稿を別に改めたいと思う。

24. 筆者は本稿の目的語性テストとその数値化の提案について年来より考えていたのだが、本稿執筆の最終段階で山岡(2010)が「英語における「補語」の段階性」について議論しており、「補語指数」という概念を提案していることを知って、大変参考になった。山岡と筆者の考えは相補的役割を果たすのではないかと思われるが、両者の比較等は稿を別に譲りた。
25. 重要なことだが、本稿の目的語性テストの提案と各々の文の統語構造が実際にどうなっているかはまた別の問題である。様々な可能性が考えられ、筆者もそれに対する意見を有しているがそれを本稿で記す余裕はない。

例えば、目的語性テストで-1点となる resemble は(21a) *Her mother is resembled by Mary. のように受身が不可能な動詞であるが、-1点であることから後続するNPが補語であるとするのなら、(10d) Mary resembles her mother. は He looks happy. と同様の繰り上げ動詞構造を有していることとなる。また、-1点を周辺的な目的語とするなら通常の他動詞構造を有していることとなる。その場合、高見(2011)などは意味論的、機能論的条件によって受身が不可能な理由を説明するはずである。あるいは、中島(2017)は resemble は実は非対格動詞(unaccusative verb)でその目的語は前に to が隠れている「見せかけの目的語」であると主張している。

各々の文型の英文の統語構造の解明は英語学者の不断の課題である。

参考文献

- 安藤真雄(2005)『現代英文法講義』東京：開拓社。
安藤真雄(2008)『英語の文型——文型がわかれば、英語がわかる』東京：開拓社。
Bolinger, Dwight (1975) "On the Passive in English." *LACUS* 1: 57-80.
Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, MA.: MIT Press.
Cooper, Alice Jane and Edward Adolf Sonnenschein (1889²) *An English Grammar for Schools Based on the Principles and Requirements of the Grammatical Society, Part II: Analysis and Syntax*. London: Swan Sonnenschein.
長谷川欣佑(2003)『生成文法の方法——英語統語論のしくみ』東京：研究社。
細江逸記(1917)『英文法汎論』東京：文会堂。(細江逸記(1971)『英文法汎論』(改訂版)東京：泰文堂。)
伊東治己(2019)『入門期からの英語文型指導——チャック文型論のすすめ』東京：研究社。
伊藤裕道(1993)「日本における「5文型」形成の再検討——ネスフィールド・斎藤秀三郎の再評価——」『英語英文学論叢』第15号、63-82。日本大学大学院英語英文学研究会。
伊藤裕道(1996)「日本における Complement 「補語」成立の一考察」『日本英語教育史研究』11巻、45-80。
Jackendoff, Ray S. (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge, MA.: MIT Press.
Kajita, Masaru (1977) "Towards a Dynamic Model of Syntax." *Studies in English Linguistics* 5: 44-76.
勝見務(2001)『英語教師のための英文法再整理——7文型のすすめ』東京：研究社。
川嶋正士(2015)『「5文型」論考——Parallel Grammar Series, Part IIの検証』東京：朝日出版社。

- 宮脇正孝 (2012) 「5 文型の源流を辿る : C. T. Onions, *An Advanced English Syntax* (1904) を越えて」『専修人文論集』90: 437-65.
- 中島平三 (2017) 『斜めからの学校英文法』東京: 開拓社.
- 中村捷 (2018a) 『発話型英文法の教え方・学び方』東京: 開拓社.
- 中村捷 (2018b) 「5 文型は学習上役に立たない」池内正幸・窪園晴夫・小菅和也編『英語学を英語授業に活かす——市河賞の精神を受け継いで』119-36. 東京: 開拓社.
- Nomura, Tadao (2006) *ModalP and Subjunctive Present*. Tokyo: Hituzi Syobo.
- 野村忠央 (2019) 「混乱の多い英語学の専門用語, 知っておくべき英語学の専門用語 (1)」野村他編 (2019), 145-62.
- 野村忠央・女鹿喜治・鶴崎敏彦・川崎修一・奥井裕編 (2019) 『学問的知見を英語教育に活かす——理論と実践』東京: 金星堂.
- Onions, C. T. (1904) *Advanced English Syntax*. London: Kegan Paul.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Radford, Andrew (2016²) *Analysing English Sentences*. London: Cambridge University Press.
- 高見健一 (2004) 「二重目的語構文 (2) —— 構文の意味と動詞 ——」『英語教育』2003 年 11 月号, 62-64. 東京: 大修館書店.
- 高見健一 (2011) 『受身と使役——その意味規則を探る』(開拓社言語・文化選書 25) 東京: 開拓社.
- 外池滋生 (2014) 「Part A: 英文法」野村忠央・菅野悟・野村美由紀・外池滋生『英文法の総復習とワンクラス上の英作文』1-129. 東京: DTP 出版.
- 外池滋生 (2017) 「Part A: 英文法」野村忠央・菅野悟・野村美由紀・外池滋生『[新版] 英文法の総復習とワンクラス上の英作文』1-129. 東京: DTP 出版.
- 外池滋生 (2019) 「伝統的な 5 文型から 9 文型への拡大, そして 1 文型への還元」野村他編 (2019), 64-78.
- 外池滋生編著, 笠井貴征・遊佐典昭・佐藤徹治 (1995) 『ディスカバリー 高校総合英語』東京: 啓林館.
- 八木克正 (2007) 「[書評] 安藤貞雄『現代英文法講義』」『英語語法文法研究』第 14 号, 145-65.
- 山岡洋 (2010) 「英語における「補語」の段階性——学校文法における補語の扱いについて——」『言語教育研究』創刊号, 79-90. 桜美林大学大学院言語教育研究科.
- 山岡洋 (2014) 『新英文法概説』東京: 開拓社.